

1 . 流域の自然状況

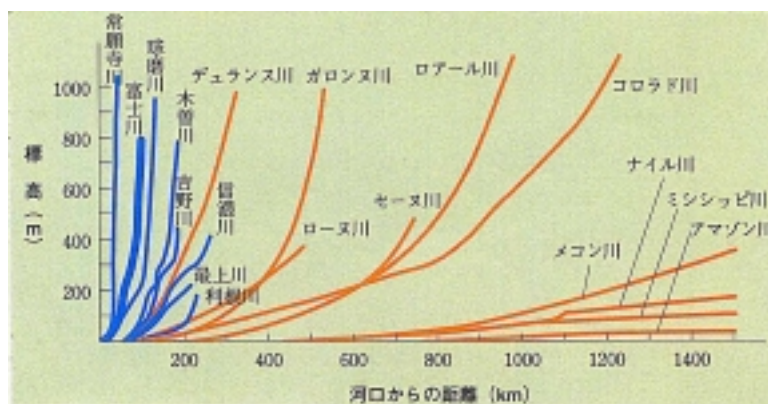
1 - 1 河川・流域の概要

富士川はその源を長野、山梨県境の南アルプス甲斐駒ヶ岳の北西に位置する鋸岳(標高2,685m)に発し、北上したのち流路を南東に変え、八ヶ岳裾野に横たわる峡谷をなす一大断層に沿って流下し、右支川として急流河川の大武川、小武川、御勅使川等、また左支川として塩川等を合わせ甲府盆地西部を南流している。

富士川の上流部は山間渓谷・甲府盆地が広がり、富士川と笛吹川に挟まれた天井川の状態となっており、ヨシ・オギなどの群落が見られ、アユ釣りで賑わっている。清水端下流の中流部では山付き堤が所々に分布し、魚類や鳥類などの種類数も多く、豊かな自然環境を有している。一方、秩父山地の甲武信ヶ岳(標高2,475m)を水源とする笛吹川は、山間狭窄部を経て甲府盆地へ入り、重川、日川及び甲府盆地の平地河川等を合わせ、甲府盆地東部を南流し、市川大門町において富士川に合流している。その後富士川は再び山間部へ入り、早川、波木井川、芝川等の支川を合わせ静岡県富士市において駿河湾に注いでいる1級河川であり、河口部に扇状地を形成している。なお、一般的には富士川のうち、笛吹川合流点より上流を釜無川という名で親しまれている。

富士川流域は長野、山梨、静岡の3県にまたがり、流域面積3,990km²(沼川流域含む)、幹川流路延長128kmをもち、1次支川には笛吹川、早川、御勅使川等、2次～6次支川には荒川、平等川、潤井川等、総計552の法河川を有している。

富士川流域は、約90%が山地であり、我が国第1位(富士山)、2位(北岳)の高峰を流域内に持つことから、富士川の河床勾配は急で最上川、球磨川と並んで「日本三大急流河川」といわれている。また、流域内の地質は複雑で脆弱である。これは「糸魚川～静岡構造線」と呼ばれる大断層が流域内を縦断している(P1-5参照)のに加え、平行、交差する断層が幾筋もあることに起因する。このため流域内には崩壊地が多く、崩壊した土砂が富士川に流出・堆積して天井川を形成している。

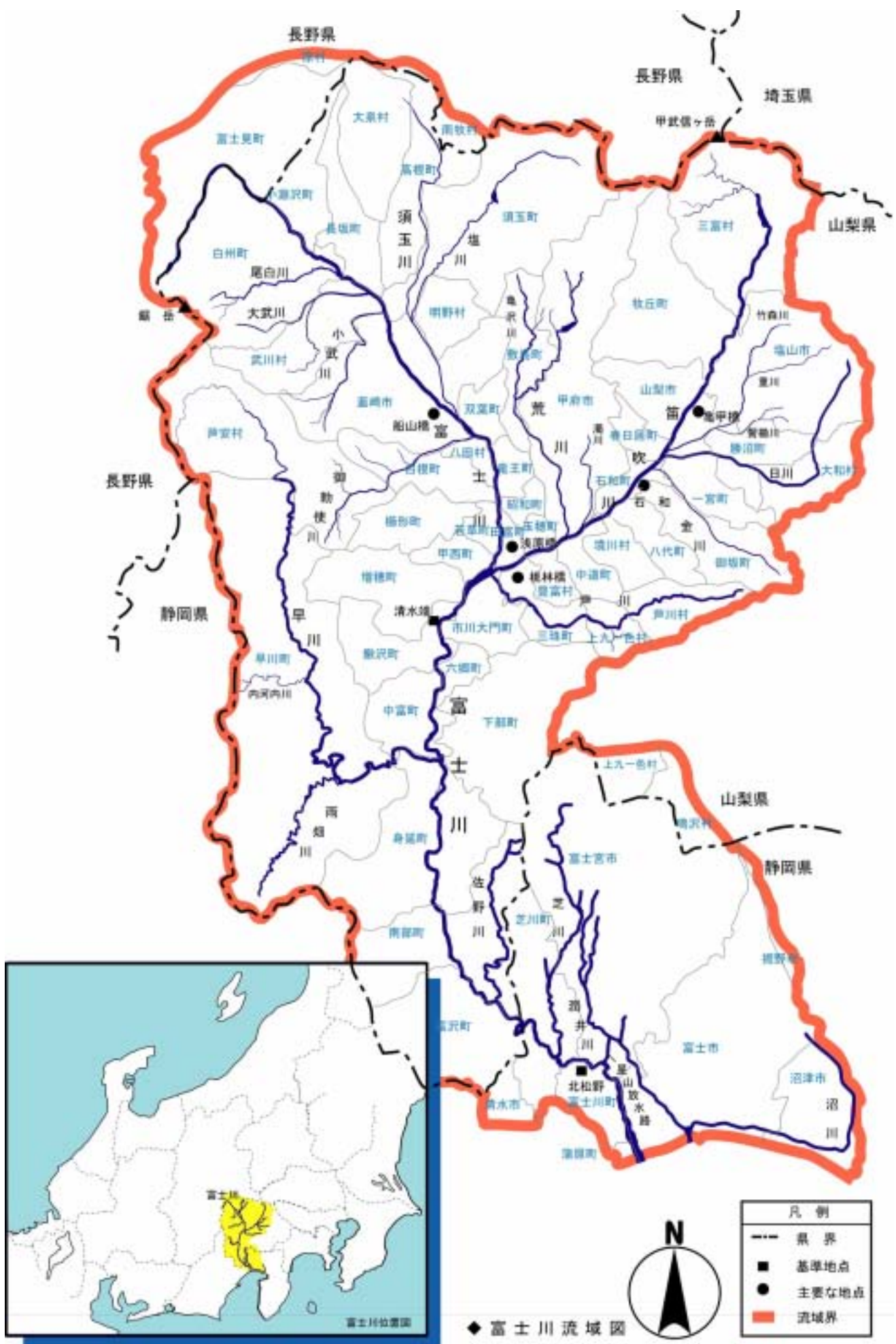


富士川と他の河川の勾配

(出典:「富士川の治水を見る」甲府工事事務所パンフレット)

富士川流域の一部には秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園、富士箱根伊豆国立公園といった自然の宝庫が含まれている他、急峻な山々や溪谷が美しい眺望を見せ、レクリエーションの場としても利用されている。

また、甲府盆地内の甲府市及び河口部の富士市、沼津市は、山梨県並びに静岡県の中東部地区における社会・経済・文化の基盤をなしている他、人口・資産が集中しているため、今後、本水系の治水、利水機能の重要性が増々高くなるとともに環境についても適正に管理する事が極めて重要になってきている。



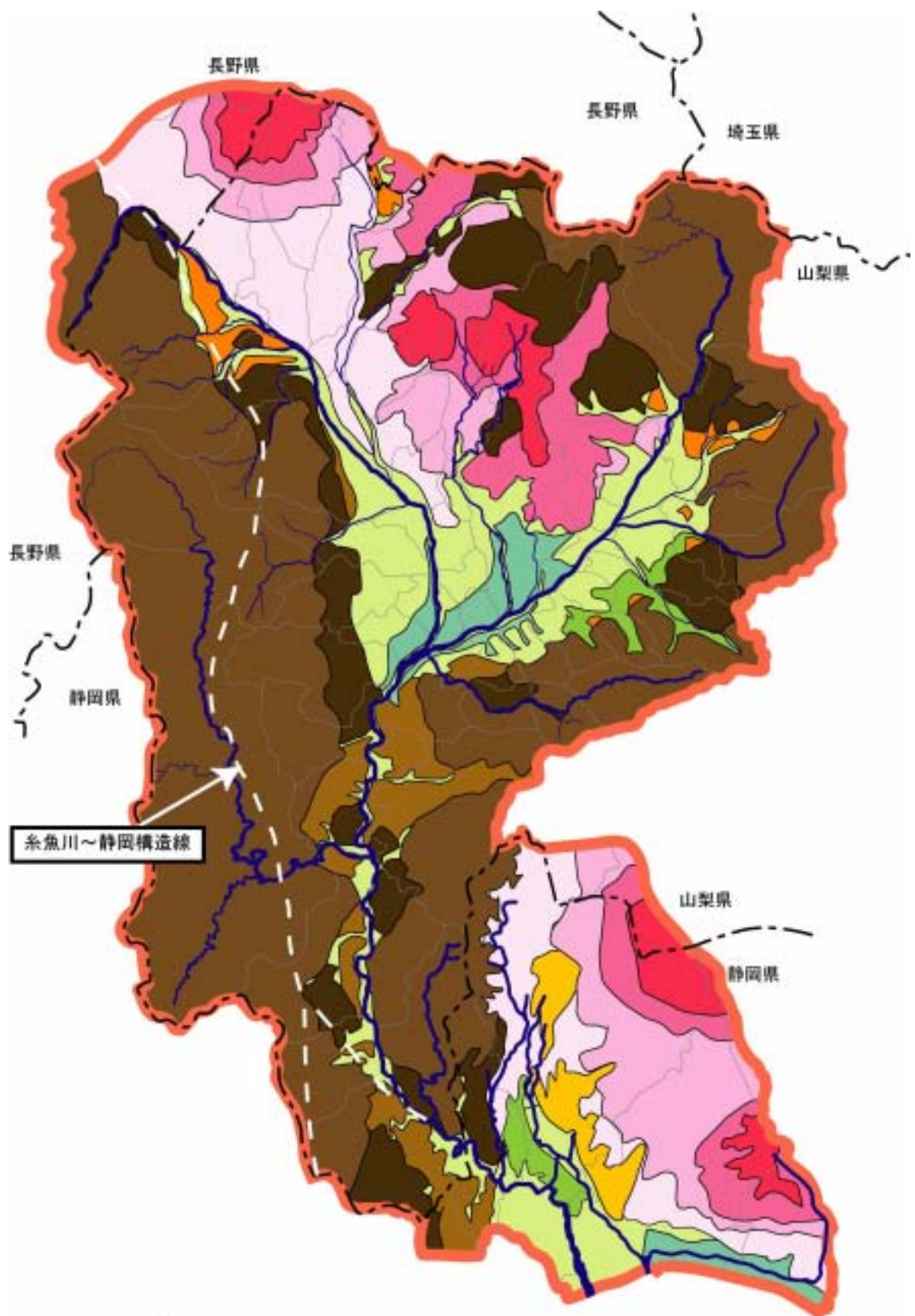
1 - 2 地 形

富士川流域の地形は、山梨県では甲府盆地とそれを取り囲む秩父山地、南アルプス山地、御坂^{みさか}山地などからなり、北岳、八ヶ岳、鳳凰三山、大菩薩嶺などの3,000m級の名峰が連なっている。釜無川、笛吹川両河川が合流する甲府盆地は、扇状地性の沖積平野を形成し、その下流部にあたる峡南地域は、富士川の東側を天守^{てんしゅ}山地、西側を身延^{みのぶ}山地が連なり、富士川はその間を流れくだっている。

河川形状をみると、甲府盆地内を流れる部分は平地河川となっているが、富士川（釜無川）の上流部、笛吹川上流部、禹之瀬^{うのせ}から下流部の県境付近までは溪流の景観を呈している。

このように富士川流域は、我が国第1位（富士山）、2位（北岳）の高峰を流域内に持ち、富士川の河床勾配は大変急であり、最上川、球磨川と並んで「日本三大急流河川」といわれている。

静岡県では、富士山西南の山麓が駿河湾に向かって広がり、富士川の河口部は扇状地を形成している。



凡 例			
	流域界		大起伏山地
			中起伏山地
			小起伏山地
			大起伏火山地
			中起伏火山地
			小起伏火山地
			火山山麓地
			台地・段丘
			ローム台地
			扇状地性低地低地
			三角洲性低地
			火山性扇状地

◆富士川流域の地形

(出典：土地分類図 長野県/昭和49年、山梨県/昭和48年、静岡県/昭和46年より作成)

1 - 3 地 質

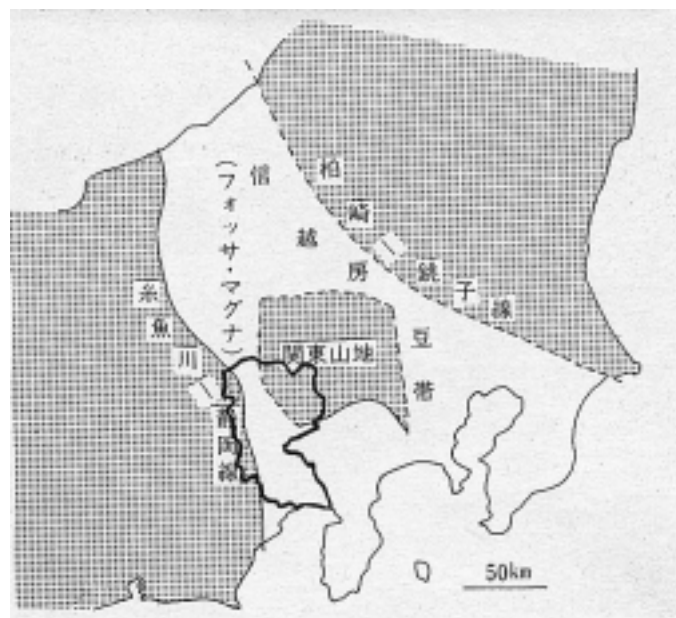
富士川流域の地質の特徴は以下のように示される。

流域の北東部にあたる甲府盆地北方山地の地区は、花崗岩類・粘板岩等が基盤をなし、これらに沿って火山性岩石が南部を広く覆っている。中央の甲府盆地の基盤は、花崗岩、安山岩からなり、その上を砂・泥・礫の混じりあった粗粒の未固結堆積物や火山噴出物が覆っている状況である。八ヶ岳南麓の山地は安山岩によって構成され、その南の平原は泥岩・火砕流として流下した半固結や一部固結した火山砕屑物が大量に堆積している。

中流部の東域にあたる御坂山地の地域は新第三紀の火山性岩石と堆積岩で構成されるが、特に玄武岩と花崗岩が主流となっている。南アルプス東部は、主に中生界・古第三系の粘板岩、頁岩、砂岩および花崗岩類で構成されている。さらに、早川、春木川の縦谷と鳳凰三山東麓はフォッサ・マグナの西縁を画す大断層である糸魚川～静岡構造線となっている。

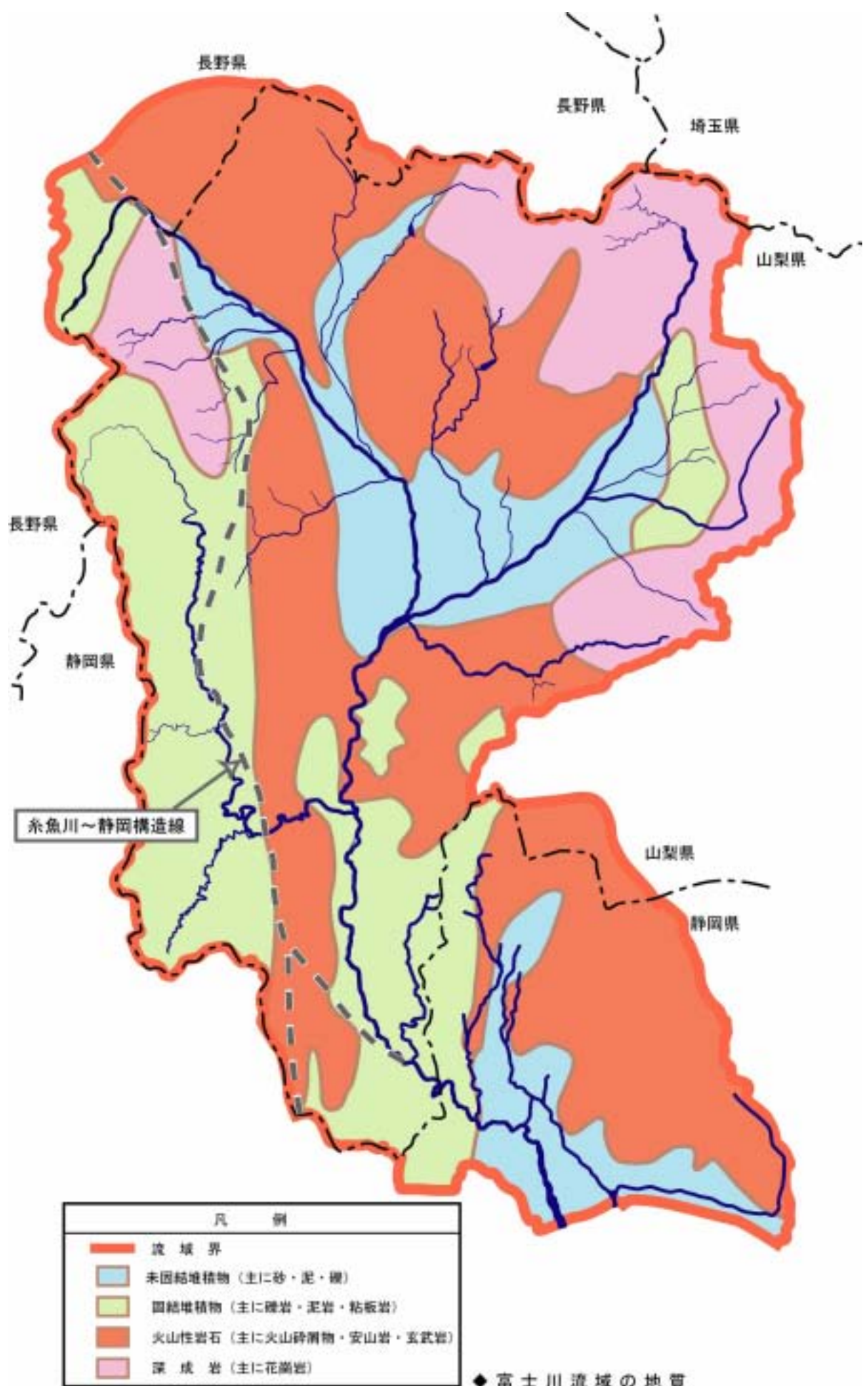
下流域の富士川沿川の低地帯は各種の固結堆積物と火山性岩石からなっている。河口の富士川扇状地ではシルト層を挟在する砂礫層が堆積し、また、扇状地東部の浮島ヶ原は、海成砂層、粘土層からなり、一部は泥炭化している。

以上のように、富士川は、日本列島を東西に分割する糸魚川～静岡構造線に沿って流下する河川であり、多くの断層群の影響で、流域が崩壊しやすい条件にある。そこに豪雨とともに洪水となると、土砂が崩壊して富士川に流出し、土砂移動とともに著しい河床変動を引き起こす大きな要因と考えられる。



フォッサマグナ位置図

(出典：平林照雄「フォッサ・マグナ」より作成)



1 - 4 気候・気象

富士川流域の気象は、上・中・下流において全く異なる様相を呈している。上流部の甲府は、1988年～2000年の平均気温14.8度、平均降水量1,165.6mmであり、気温の年較差が多く、雨が少ない内陸的な気候を示している。中流部の中富^{なかとみ}では、山地部ということもあり、平均気温は13.7度と最も低く、台風期の降雨量が最も多いという特徴を持つ。一方、下流部の吉原^{よしはら}は、平均気温15.9度、平均降水量2,150.1mmであり、気温の年較差の少ない、温暖多雨の気候となっている。

表 甲府・中富および吉原における月別平均気温（1988年～2000年）（ ）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
上流(甲府)	3.4	4.3	8.1	13.9	18.2	21.9	25.4	26.7	22.9	16.7	10.5	5.2	14.8
中流(中富)	2.1	3.3	7.2	12.8	17.2	20.8	24.4	25.8	22.0	15.7	9.5	3.9	13.7
下流(吉原)	6.2	6.4	9.6	14.3	18.1	21.5	24.9	26.5	23.7	18.3	13.2	8.2	15.9

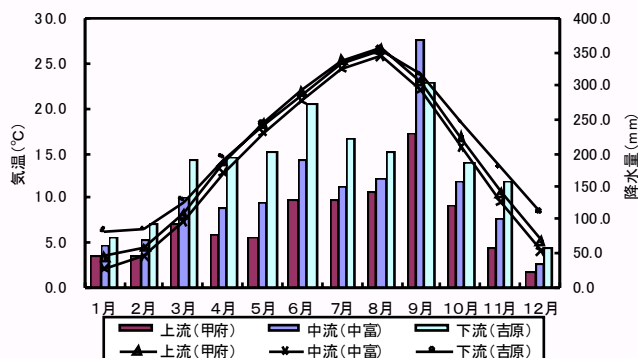
(出典：気象庁資料)

表 甲府・中富および吉原における月別平均降水量（1988年～2000年）(mm)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
上流(甲府)	43.5	44.3	93.8	78.8	76.2	131.3	129.5	141.0	229.8	120.5	56.1	20.9	1165.6
中流(中富)	62.2	70.5	135.5	118.7	125.2	190.0	149.8	159.9	366.3	158.5	101.7	34.0	1672.4
下流(吉原)	73.5	93.8	187.6	195.4	201.3	275.2	221.4	202.8	304.8	183.2	156.0	55.1	2150.1

(出典：気象庁資料)

流域の気象の概況



観測所位置図